

# こども環境サミット札幌への参加による環境教育実践の国際比較

長島康雄\*・高田淑子\*\*

The International Comparison of Environmental Education Practices shown in “Children's World Summit for the Environment in Sapporo”

Yasuo NAGASHIMA and Toshiko TAKATA

**要旨**：本稿では、先進国首脳を集めた北海道洞爺湖サミットのプレ企画の1つとして行われた「こども環境サミット札幌」(平成20年6月)の概要を紹介した。その上でこども環境サミット札幌の参加を通して明らかになった日本の環境教育実践と海外の環境教育実践の比較検討を行うこと、さらには環境問題の解決には、国際的に連携した取り組みが重要であることから、国際理解教育と環境教育との関連性を検討した。その結果、日本の環境教育実践には「Think globally Act locally」のうち「Act locally」の部分が特に意識されていること、国際理解教育と環境教育が相当な重なり合いを持つようになってきていることを指摘した。

**キーワード**：こども環境サミット札幌、海外の環境教育実践、国際理解教育と環境教育の関連性

## 1. はじめに

平成20年7月に福田総理大臣(当時)のリーダーシップの下で北海道・洞爺湖サミットが開催された。ブッシュ大統領を始め、先進国の首脳が集まり、地球規模で連携して取り組むべき課題が議論された。サミットの会場は先進国の持ち回りで行われるため、国内でも約10年に1度の開催となる。そのため関連した記念事業が日本各地で行われた。

その1つが札幌で行われた「こども環境サミット札幌(以下、こどもサミットと呼称する。)」(6月26日から29日までの4日間に実施)である。これは洞爺湖で行われるサミットのプレイベントの1つとして行われたもので、「地球の未来へ、いま、僕たち・私たちにできること」という開催テーマの下で、札幌市と環境施策で連携を組む国内の6都市と海外の姉妹都市10カ国の小学生から中学生が集まり、地球環境について考えるという教育活動である。図1は主会場となった札幌市郊外にあるモエレ沼公園ホールである。太陽光をやわらかく通すガラス張りのホールで、サミットの意義そしてテーマを国内外の子どもたちに感じさせるに十分な会場であった。

仙台市からは加茂中学校の3名が代表として参加することになり、筆者の一人である長島が引率者の立場で4日間の子どもたちによる話し合い活動を体験することになった。



図1. 会場となったモエレ沼ホール

本稿では、こどもサミットの概要を紹介するとともに、参加した10カ国の生徒の発表と日本国内の代表校の発表の比較を通して見えてきた日本の環境教育実践の特徴とその課題を検討することを目的とする。環境問題の解決

\*仙台市立加茂中学校, \*\*宮城教育大学理科教育講座

には、国際的に連携した取り組みが重要であることから、国際理解教育の観点と環境教育の観点との関連性も含めて議論したい。

## 2. こども環境サミットにおける環境教育的なプログラム

表1がこども環境サミットのタイムテーブルを示している。初対面のこどもたち102名を取りまとめ、積極的な議論を引き出させるために様々な工夫が凝らされていた。与えられた時間を使って意見交換を行い、子どもたちの願いを集約した宣言文を洞爺湖サミットに向けて鴨下環境大臣に手渡すという展開である。

その中でも筆者らが環境教育的にみて中心となる活動と考えたのは次の3つである。

1つは、日本を代表する登山家の1人である野口健氏の基調講演、2つめは自国の環境教育的実践の発表とそれを受けた児童生徒の意見をまとめた環境宣言文作りのための議論、3つめがフィールドワークで、札幌市郊外の西岡公園の野外観察と札幌市が所有する環境に配慮した施設の見学である。以下その活動の概要を述べる。

### (1) 野口健氏の基調講演

野口健氏は登山に関わる経験から環境について考えるようになったという。エベレスト登山には現地のシェルパの協力が欠かせないが、そのシェルパの村々が世界中で問題になっている温暖化によって危機に瀕しているという。氷河が溶け、あちこちに水が流れ出し氷河湖ができ、年に数カ所でその氷河湖が決壊し、多くの被害者が出始めていることを紹介した。シェルパの村々では環境に優しい生活を送っているにもかかわらず、先進国で大量の二酸化炭素を排出しているためにエベレスト周辺の氷河が溶けてしまっているのである。ここに環境問題の難しさがあると野口氏はいう。環境を悪化させている人間と環境の悪化で被害を受ける人が異なるということである。環境に優しい生活を送っているシェルパの人々が直接的な環境の悪化が引き起こす災害によって被害を受けているのである。

さらに下流域に位置するバングラデシュ、さらには太平洋の島状国家であるツバルにまで被害が広がっていく。環境問題には国境がないことを示すとともに解決のためには国際的な協力が不可欠であることを指摘していた。

最後に日本の小笠原での事例を紹介した。野口氏の環境セミナーに参加した子どもたちがゴミ問題の解決を村長に訴えたところ、大人も巻き込んだ環境運動に発展したという事例である。それを受けて、この「こども環境サミット」の参加者が協力して声を上げていくことが国際的な広がりを持った取り組みに発展する可能性があることを指摘し、参加した子どもたちを励まして講演をしめくくった。

表1. こどもサミットのタイムテーブル

6月26日	13:00～	札幌市役所表敬訪問 市内観光
	16:30～	対面式 オープニングセレモニー
	19:00～	全体オリエンテーション グループタイム
6月27日	8:00～	オリエンテーション
	10:00～	開会式
	10:30～	基調講演
	12:30～	ワークショップ1
	14:45～	ワークショップ2
	16:30～	記念植樹
	17:00～	フレンドシップパーティ
19:30～	ファンタイム	
6月28日	9:30～	札幌市内施設見学
	13:30～	ワークショップ3
	15:30～	フィールドアクティビティ
	16:00～	ワークショップ4
	19:00～	フラッグメッセージ
	20:30～	宣言書作成
6月29日	10:30～	宣言セレモニー
	12:00～	フェアウエル・パーティ

### (2) 参加者による環境教育的な取り組みの報告と環境宣言文作成のための議論

海外の国々から参加した生徒ならびに日本校内で先進的な取り組みを行っている学校が集まり、それぞれの優れた点を学び合うための場である。自国語と英語の2通りで発表が行われた。与えられている時間は6分という短い時間であったが、それぞれの学校で取り組まれている環境教育的な活動のエッセンスが盛り込まれた発表会であった。海外の子どもたちの発表と日本の子どもたちの発表で興味深い違いが見られたので、次節においてその差異を詳説する。

海外から参加した国毎にグループを作り、それぞれの国の環境問題を取り込む形で、各国毎に宣言文に盛り込むべき内容に関する議論が行われた。表 2 が環境宣言文作成の基礎資料となるもので、各国のグループが議論を重ねた結果を示したものである。それぞれの国々で直面している環境問題を表したものになっている。なお主催国である日本のこどもたちは各国のグループの中に入り討議に参加する形をとっているため、10カ国のグループ分けとなっている。

### (3) 環境への配慮をした札幌市の施設の見学

環境にやさしい政策を推進している札幌市の施設として札幌ドームの見学(図 2)と札幌郊外の西岡公園の野外観察を行った。

前者のスポーツ施設として札幌ドームは全国に先駆けた環境負荷を下げるための工夫を凝らしている。野球チームの日本ハムファイターズの本拠地であるとともに、サッカーチームのコンサドーレ札幌のホームスタジアムでもある。これは人工芝と天然芝が切り替えられるホバリングシステムという世界初の方法を採用することで実現した。開閉型ドームであり、しかも壁面に強化プラスチック製の採光窓が設置されているため最大限自然光を利用できる。

後者の札幌市郊外の西岡公園では、北海道の代表的な里山林を観察した。これまでに何度も宅地開発等の危機が迫ったが、その都度市民が立ち上がって保存してきた里山林であるという。海外の子どもたちにとっても新鮮

表 2. 環境宣言のための検討結果

国名	テーマ	グループ宣言
フィリピン	「廃棄物」	廃棄物を減らすために自分の所有物になったものは最後まで使い切ります。
オーストラリア	「緑を大切に」	緑を守るために植物を植えてます。森林資源を大切にします。森林伐採について知り、家族や友人に伝えます。
シンガポール	「生活習慣を改善しよう」	未来の地球環境のために私たちはできるだけ無駄を減らし生活習慣を改善します。
アメリカ	「大量消費」	大量消費を防ぐために、私たちは本当にそれは必要か買う前に考えます。ガソリンの消費量を減らします。中古品の再利用とリサイクルを進めます。
インド	「身近にできることから始めよう」	人間と生物が共生するきれいな地球にするために私たちは、ここで学んだことをみんなに伝えます。食べ残しをしません。資源を大切にします。
中国	「水」	水を大切にするために私たちは水資源の限界を意識します。そのために水の無駄使いをやめ、できるだけ再利用します。
ロシア	「ライフスタイル」	私たちは地球環境を守るために「エコの心」で自然を感じ、「エコの眼」で自然を見て、「エコの手」で自然を大切にすることを誓います。
ドイツ	「熱帯雨林」	森を守るために紙を分別し、リサイクルします。より良い生活のために森林の伐採を止めます。森林がなければ生きていけません。この考え方を世界中のみんなと共有します。
タイ	「二酸化炭素削減」	二酸化炭素排出を削減するために必要以上に資源を使わずに自然エネルギーを利用します。
韓国	「残された資源を大切にしよう」	水の大切さと価値を知り、それを上手に使おう。水は必要な分だけ使います。部屋の人がいなくなるときには電気を消します。

な感動を引き起こしていたようであった。

これらの施設見学を通して地方行政における環境への対策について子どもたちは学ぶことができた。



図2. 自然光が取り入れられた札幌ドーム

### 3. 各国の児童生徒の発表と日本の児童生徒の発表の概要

#### (1) 海外の都市を代表して参加した子どもたちによる環境教育的な実践報告

オーストラリアの代表からは石炭産業に支えられているオーストラリアの経済的な背景がまず説明された。その主たる輸出先が日本であるという。石炭産業と整合させつつ、広大な国土を生かして太陽エネルギーや風力発電などのクリーンエネルギーの利用を進め、二酸化炭素の排出量を減らすための取り組みを進めていくための実践を進めているという発表であった。

中国の代表からは都市を流れる川に関する環境実践が報告された。急速な近代化を進めている中国では環境よりも産業の発展が重視された。そのため子どもたちが生活する都市を流れる川が汚れてしまったという。そこで水質調査を行うところから出発して、河川敷の清掃や下水道の浄化などの取り組みを行ったという。その取り組みで川にきれいな流れが戻ってきたという。

ドイツの代表からは、自動車に依存しない生活を地方自治体が目指していることが紹介された。また二酸化炭素の吸収源として自国の植林を進めるとともに熱帯雨林の保全が急務であることを指摘した。また生活スタイルの改善点として暖房を工夫することが省エネにつながることに着目しているという。

インドの代表校で取り組まれているのは、啓蒙活動で

あるという。「地球の日」と名付けられた記念日を設けて、地球の未来につながるテーマを掲げたお祭りを行っているという。絵画コンクールや校庭を緑でいっぱいにするための植林なども行われるという。

フィリピンからは、違法な森林伐採、大気汚染、ゴミの不法投棄といった問題が自国で大きな環境問題になっていることを指摘し、政府を始め地方自治体も改善のためにできる限りの努力を重ねているという説明を行った後に、子どもたちにどんなことができるかを学校あげて考え実行していく運動を行っているということであった。

韓国では、朝鮮戦争時代に多くの山林を焼き払われ、荒れた状態になっている地方が多いことが説明された。代表校の都市においても例外ではなく市長選の公約に300万本の樹木を植えるといったことが入れられているという。その上で二酸化炭素削減のために自動車ではなく自転車の利用などが推奨されているという。

ロシアのノボシビルスクから来た代表校の子どもたちは、度重なる戦争によって軍需産業が優先され、環境政策が後回しになった歴史についての説明の後に、現在の取り組みとして、植林作業や世界的に貴重な湿地の保全を行っているという報告があった。市をあげてエコフェスティバルなどが企画され、学校も積極的に参加しているという。

シンガポールの代表校からは、自国の面積が狭いため、高い人口密度をもつ国であることが説明された。その中で環境問題として最も重要なものが水であるという。シンガポールでは水は常に不足した状態にあり、他国から買う水、地下水、雨水という従来から使われてきた水に加え、「新しい水」として注目される水があるということであった。それは「下水処理によって再生された水」であるという。科学技術の進歩によって水の高度な再利用を進めているという。

タイのバンコクから来た代表校の子どもたちによれば、交通渋滞がバンコクの最も大きな環境問題であることが指摘された。自動車が排出する二酸化炭素が地球環境に大きな影響を与えているため、それを上回るような植林作業を展開したいと政府を始め、自らが通う学校においても環境実践を行っているという。

アメリカのポートランドから来た代表の子どもたちの視点は、自国の課題だけではなく世界全体に及んでいた。



図 3. 話し合い活動の様子

大気汚染、水質悪化、土壌汚染、地球上の各地で起こっている生物の絶滅などの問題点を指摘していた。その上で改善するための処方箋は「個人の選択」にかかっているという。その選択を環境に優しいものにするための啓蒙活動が最も重要であると指摘していた。

図 3 は加茂中学校の生徒がアメリカグループに加わって、宣言文の作成に向けた話し合い活動を行っている様子を示している。

#### (2) 日本の 6 都市の代表による環境教育的な実践報告

日本国内から北九州市・広島市・京都市・川崎市・仙台市・札幌市の 6 都市から代表生徒が発表を行った。

北九州市からは「もったいないプロジェクト」という取り組みについて発表があった。空き缶、ペットボトルのリサイクルを学校全体で取り組んでいるという環境実践であった。また上記のものが河川敷に多く捨てられているという現状をふまえてポスター等を学区内に掲示して啓蒙活動を進めているという。その取り組みを「緑の小道環境日記」という形で記録し続けるという。

広島市からは「交通と環境」に関連して身近にできる環境実践が進められているという発表があった。広島市の主要産業の 1 つである自動車（水素自動車）開発の調べ学習を行っていることが報告された。学校で作成した環境に優しい交通の姿を学習するための「交通すごろく」を作成した経緯などが報告された。

京都は「京都議定書」の実現に向けた環境への取り組みが京都市全体で取り組まれていることが報告された。昨年度には京都ジュニアサミットを開催したという。また「子どもにできることは大人にもできる」というキャッ

チフレーズを基本スタンスにして啓蒙活動を進めているということであった。

川崎市の代表校からは「地球環境と自らの生き方を考える環境技術」と銘打った取り組みが行われていることが報告された。具体的には校内で使われる消費電力と水の使用量を生徒へ知らせて環境への意識を高めているという。学校全体をあげて節電、節水の効果をあげているということであった。電気料金から二酸化炭素使用量を換算して「黒く染めるな青い地球」というキャッチフレーズで盛り上げているという内容が報告された。

仙台市の代表として参加した加茂中学校では「光害調査活動の成果とその環境教育的な意義」（長島ほか、2003、2006）を報告した。図 4 は加茂中学校の生徒が発表を行っている様子を示している。



図 4. 加茂中学校の発表の様子

札幌市の代表は札幌市民が排出するゴミの内容と量についての調べ学習が報告された。具体的な量をイメージすることで、学校全体でゴミを減らすための工夫を行っているという内容が報告された。

## 4. こども環境サミットにおける環境教育的な実践の比較検討

### (1) 日本の 6 都市の代表によると海外 10 カ国の代表による環境教育的な実践報告の違いの検討

諸外国の環境教育への取り組みを、児童生徒の発表を通じて直接的に聞く経験と、諸外国の教員との議論に参加する機会を得て、国や地方自治体の環境政策について学校教育の中で扱う必要があるということを指摘したい。

筆者自身、学校現場で環境教育を担当しつつも、具体的な国の環境政策について取り上げたことはない。また筆者がこれまで受けてきた教育の中で、そういった種類の学習を体験したこともない。海外の子どもたちの発言や課題設定を実際に見聞すると、この点に一番の違いを感じられた。

より効果的な環境実践を目標とするのであれば、学校規模での取り組みだけではなく、国、地方自治体の環境政策との整合性を常に意識していかせる必要があることを指摘したい。

海外の子どもたちの報告する環境実践と比較して浮き彫りになった日本の子どもたちによる環境教育実践の特徴は「生徒の手の届く範囲の中で実践を行う」という哲学に従って行われているという点であった。環境教育でしばしば引用される「Think globally Act locally」のうち「Act locally」について各学校で徹底されて指導され、環境教育的な実践にも十分に反映されていることがわかった。筆者が所属する学校においても当てはまることであるが、節水であったり、節電であったり、地域の清掃活動、学区内の河川や沼沢の保全活動といった内容である。

一方、海外の生徒の発表や発言には地域の活動についても言及があるものの、必ずといってよいほど自国の環境政策についてのコメントが批判的に取り込まれていた。言い換えれば自分たちの手の届かない環境問題についても厳しい眼を向けていることを意味している。

これは一部の代表校をのぞくと、日本の生徒の発表には国の環境政策についての言及がほとんどなかったことと対照的であった。海外の子どもたちの環境実践には「Think globally Act locally」のうち「Think globally」についての視点が強く出ていたといえる。日本の発表で、手の届く環境実践以外の広い視点に立った取り組みを紹介していたのは京都の代表による発表であった。背景には環境対策としての国際的な取り決めである「京都議定書」がある。これを基本にすえて、地方自治体あるいは学校が、どう取り組んでいくべきかが京都の発表には明確に打ち出されていた。

筆者らの生活域である仙台市でもレジ袋の有料化に伴うゴミ減量、一段と細分化されたゴム分別、化石燃料の利用からより自然に優しいエネルギーへの転換など多様

な取り組みが試みられており、大きな成果が上がってきている。こういった優れた成果を積極的に学校教育の中で良き事例として取り上げていく必要があると思われる。

一例として図5に最近5カ年にわたる環境省重点施策（環境省、2008）を示した。これは日本国内の環境に関わる現状の問題点などをふまえて毎年度毎に、12月に公表されるものである。これらと学校教育の環境教育のテーマ設定をリンクさせることも今後の展開として必要ではないかと考えている。

例えば平成17年度は、身近な暮らしから始まる環境と経済の好循環と環境教育の推進として、まちづくりを通じた地域再生の推進、学校における環境に配慮した施設整備・改修及び住民・生徒への環境教育の推進、家庭等における子どもから高齢者まで全員参加の環境教育の展開が大きく取り上げられている。また平成21年度は北海道洞爺湖サミットを受けて、世界全体として2050年までに温室効果ガスの排出量を少なくとも半減することを目指す必要があることから、化石エネルギーへの依存を断ち切り、低炭素社会へ移行するための取り組みが協調されている。

自らが所属するところの国の政策、あるいは地方自治体の優れた取り組み、これらと積極的に連携させ、学校現場の中で取り入れ教材化していく視点は、「Think

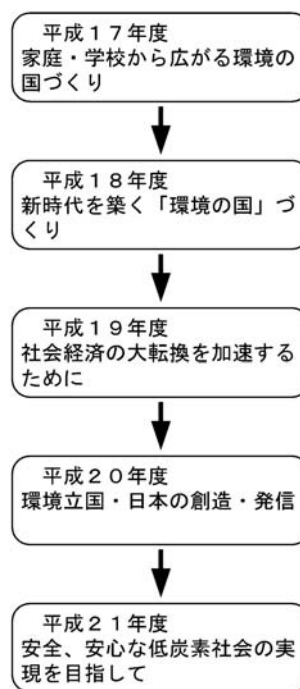


図5. 環境省の重点施策の流れ

globally Act locally」のうち「Think globally」を強化していくため手だての1つとなる。

また環境教育が具体的に功を奏するような実践となるためには、1つの学校内だけの取り組みで完結してしまうのではなく、広いネットワークでつながった地域レベル、市町村レベル、都道府県レベル、さらには国レベルの協同の取り組みを行うことが有効である。少なくとも環境省の重点施策をベースにするのであれば国内で共通した問題意識、問題設定をすることができるようになる。こういった環境教育実践も試みる価値がある。

(2) 国際理解教育の視点と環境教育の視点

国際理解教育とは、一般に世界の人々と力を合わせ、地球全体にかかわる課題を解決するための能力を育てようとする教育を指し、世界には異文化が多様に存在することを教えるなかで、文化的寛容と相互協力の態度、そして地球市民としての責任感を育てようとする点に特徴がある。

1980年代までの国際理解教育は、異なる文化、政治経済体制について知識として学ぶ学習、国際化の進展をふまえた国際交流を進めるための学習、海外帰国子女の増

加を受けた異文化理解に力点が置かれた学習（長島、1994）と多岐に分かれていた。しかし1990年代から始まる世界的な国際理解教育への関心の高まりを受ける形で、アメリカではグローバル教育（浅野・D, Selby, 2002；魚住、1995）、イギリスではワールド・スタディーズ（D. Hicks&M.Steiner.1991；S.Fisher&D. Hicks, 1991）と呼ばれる新たな国際理解教育的な学習が登場してきた。どちらも学習対象に、環境、開発、人権、平和などの人類的課題を設定し、共生、共存を目指す立場から総合的に学習プランが絡み合う展開タイプの教育プログラムである。

この動向は日本にも影響を与えた。文化的寛容性を育てる異文化教育、共生への態度を育てる多文化教育、環境問題や平和の問題など地球全体の課題を考えるグローバル教育、そして南北問題を中心に環境や経済システムの問題を考える開発教育などを包含する形で、現在の国際理解教育が位置づけられるようになってきている。

国際理解教育は地球温暖化、大気汚染、世界的な水不足といった現在の地球が抱えている地球規模の環境問題も対象とすることから、内容面でも環境教育との間で明

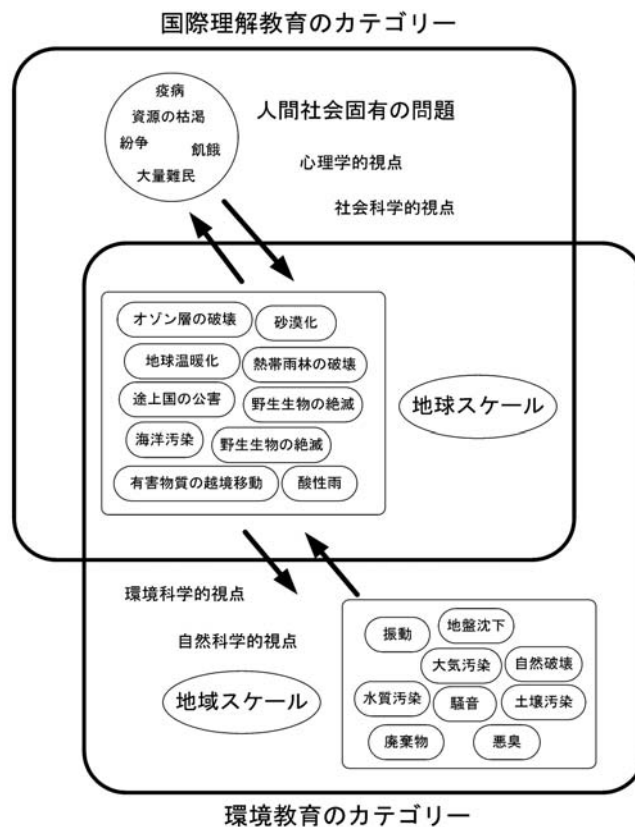


図 6. 国際理解教育と環境教育の関連性

確な線引きをすることは難しい。環境教育の相当の部分が国際理解教育との間で重なり合いを見せつつあるというのが現在の状況といえよう。図6はその関係を図示したものである。特に2005年から始まった「持続可能な開発」を実現するための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に対して高い関心が寄せられるようになって一層その傾向が強まっている。環境教育におけるスケールの重要性を十分に意識しておかないと、両者の境界線がぼんやりしたものになってしまうので注意が必要である。

ESDの先進国の1つであるスウェーデンについてレポートした門脇（2008）は、環境を悪化させ化石燃料などの資源を枯渇させるのではなく、次世代のニーズを損なわない社会づくり、国際的な協力関係の下で、「持続可能な発展のまなざし」が重要であることを指摘している。この報告からも国際理解教育と環境教育が、ほぼ同じ目標に向かった教育であることが示唆される。

## 謝辞

仙台市環境局の担当各位ならびに仙台市教育委員会の諸先生方からは、今回のこども環境サミット札幌の参加に向けて、多くのご指導と温かいお励ましの言葉を賜った。仙台市立加茂中学校の鹿野良子校長先生には研究の機会を与えていただいた。また加茂中学校の湯山春香さん、舟田祐さん、武藤海世さんは共に環境問題を考える仲間として、こども環境サミットに参加し、様々な場面で意見交換することができた。札幌市環境局環境政策課の「こども環境サミット札幌実行委員会」事務局の皆様、特に受け入れ担当窓口として佐竹輝洋氏には細にわたりご支援いただいた。藤女子大学人間生活学部教授の小林三樹氏からは環境宣言文作成のための基礎資料をご提供いただいた。

以上の方々に心より厚く御礼申し上げます。

## 追記

付表として、今回のこども環境サミット札幌で作成した「環境宣言文」を示した。諸外国ならびに日本国内から集まった先進的な環境実践を行っている子どもたちの願いが込められたものである。

枠で囲んだ部分が、仙台市立加茂中学校の主張が宣言

書に取り入れられた部分である。目的に応じた適切な照明、必要以上の照明を使わないなど電気エネルギーの適切な使用について訴えた成果である。街灯や商業ネオンなども含めるよう主張したが、その点は採用にならなかった。エネルギーを大事にする行動の筆頭にあげられている。

## 引用文献

浅野誠・David, Selby 編. 2002. グローバル教育からの提案—生活指導・総合学習の創造. 289pp. 日本評論社.

David Hicks・Miriam Steiner (岩崎裕保訳). 1997. 地球市民教育のすすめかた—ワールド・スタディーズ・ワークブック. 明石書店. 341pp

環境省. 2008. 環境省ホームページ. 環境省重点施策. <http://www.env.go.jp/guide/budget>

門脇仁. 2008. 若者の社会参加を組み込んだ「持続可能な教育」環境先進国スウェーデンからのレポート. p 10-11. Science Window. 通巻14号. 独立行政法人科学技術振興機構.

こども環境サミット札幌実行委員会事務局編. 2008. こども環境サミット札幌開催報告書. 34pp. 札幌

国際協力推進協会編. 1991. 開発教育ガイドブック. 174 pp. 明石書店.

長島康雄. 1994. 発展途上国に設置された日本人学校の実状. 教育宮城. 第455号. p60-61. 宮城県教育委員会.

長島康雄・千島拓朗・高田淑子. 2006. 初等・中等教育における光害教材の導入に関する環境教育的検討. 宮城教育大学環境教育研究紀要. 第9巻. p75-83.

長島康雄・佐々木佳恵・高田淑子・松下真人・千島拓朗・齋藤正晴・三浦高明. 2003. 中学生が実施した光害調査活動による環境評価活動とその教育的意義. 宮城教育大学環境教育研究紀要. 第6巻. p55-63.

Simon Fisher・David Hicks. 1991. ワールド・スタディーズ—学びかた・教えかたハンドブック (国際理解教育資料センター編訳). めこん出版. 178pp

魚住忠久. 1995. グローバル教育. 197pp. 黎明書房  
付表 こども環境サミット 環境宣言文



付表 こども環境サミット 環境宣言文

Children's World Summit for the Environment in Sapporo

Declaration

What can we, the young generation, do for the earth? To stop global warming, we will practice environmentally friendly life. To protect the future of global environment, we promise to feel the nature with the ECO-HEART, to see the nature with the ECO-EYES and to use the nature with the ECO-HANDS.

We will reduce emission of CO2.

To reduce CO2 emission, we will use only the amount of resources needed.

We will use natural energy.

We will do utmost to conserve greenery.

We will learn about deforestation and teach families and friends about it.

We will separate and recycle paper to save rain forests, keeping 3Rs (Reduce Reuse Recycle) in mind.

We will plant and grow trees.

We will use water wisely.

Having learned the importance of water, we will stop wasting water.

Being aware of the importance and limit of the water resource, we will promote to develop technology of cleaning sewage water from the factories.

We will do utmost save energy.

We will turn off the light when no one is in the room.

We will use less gasoline, kerosene and electricity.

We will use natural energy.

We will reduce waste.

To reduce waste, we must not dispose things that are still usable.

We will think carefully before buying - do we really need it?

We will not waste food.

We will not buy products with minimal packaging.

We will conserve resources.

We will promote reuse and recycling.

We will disseminate our thoughts to the world.

To create clean earth, where human beings and organisms can coexist, we will disseminate what we learned and mutually agreed here to the people in our community and to the world. We seriously thought about "what we, the young generation, can do "at the Children's World summit for the Environment in Sapporo. We pledge to practice environmentally friendly life. To create wonderful future of the earth, we hope that the adults will think seriously together with us and practice eco-friendly life.

June 29, 2008.

Participants in

The children's World Summit for the Environment in Sapporo